

お釈迦様最後の旅⑥

令和3年3月第2週放送

クシナーラーにて、お釈迦さまがお亡くなりになったとき、まだその死を受け入れられない若い弟子たちは悲しみに打ちひしがれたのですが、お釈迦さまの教えの通り執着を離れた弟子は・・・、

「およそつくられたものは無常である。どうして滅びないことがあり得ようか。」

と、お釈迦さまの死を受け入れました。

そして弟子のアヌルダとアーナンダは、その夜お釈迦さまの遺された教えについて、他の弟子たちと語り合いました。

次の日の朝、クシナーラーの住人であるマッラ族にお釈迦さまがお亡くなりになった事を伝え、マッラ族はクシナーラーにあるお香と花輪と楽器のすべてをもってお釈迦さまのご遺体のところまでおもむき、歌舞音曲、花輪、そしてお香をもって、ご遺体を敬い、供養を行いました。

七日間の供養の後、マッラ族のお堂に移され、そこに弟子マハーカッサパが五百人の修行僧とともに到着し、礼拝を行い、お釈迦さまは荼毘に付されました。

残った御遺骨もやはりマッラ族が七日の間、歌舞音曲、花輪、お香をもって敬い、供養を続けました。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

その後、七つの部族がお釈迦さまの御遺骨を信仰の証として欲しいと願いますが、マッラ族が自らの領土で亡くなったのだからと、承知をしませんでした。

そこで、ドーナというバラモンが間に入り御遺骨はマッラ族、マガダ国、リッチャヴィ族、シャカ族、ブリ族、コーリヤ族、ヴェータディーバに住むバラモンの八つに分配されました。遅れてきたモーリヤ族は灰を、バラモンのドーナが御遺骨の入っていた壺を受け取り、それぞれ仏塔、ストゥーパを建てて納めることとなりました。

ここまでが大パリニッパーナ経、大般涅槃経に書かれているものです。

お釈迦さま亡き後、弟子たちは「説いてきた教えと戒律を師、つまりお釈迦さまと考えてゆくように」との遺志を守り続けました。そしてお釈迦さまの教えと戒律を確認する為の第一回の集まりを開きます。これを第一結集（だいいちけつじゅう）といい、これによりお釈迦さまの教えが後世に伝えられる礎となりました。

それから二千五百年あまり。その教えは大陸を渡り日本に、そして世界へと広がっています。

— 終 —